

## <研究ノート>山村流宗家復興・補遺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森西, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4612">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4612</a>

## 研究ノート

# 山村流宗家復興・補遺

森 西 真 弓

### はじめに

立命館大学政策科学部で非常勤講師を勤めていた一九九五年、学部の紀要『政策科学』三巻一号に「山村流宗家復興——市民が支えた上方舞の伝統——」を寄稿した。明治の半ば以降、一時途絶えていた上方舞・山村流の宗家が、昭和になってどのように復興されたかの経緯を、それに携わった市民たちの活動を中心に紹介する内容だった。

その後、右の一文は現山村流六世宗家のご厚意で同流の会誌『吾斗ごのみ』五号（一〇〇九年五月）に全文が転載された。その際、三世、並びに四世宗家の襲名披露時の諸資料を写真版で加えていただき、拙稿の不備を補つて余りあった。小稿は、右記を発表以降に知り得た情報を今の段階でまとめるものである。

まずは前回に見落としていた資料から。

山村流を初めとする上方の舞が、関東の踊りの勢力に押され、劣勢を余儀なくされ始めたのは、明治末葉から大正にかけてのことだ。要因には時代状況や世相の変化が挙げられる。加えて山村流には流儀内部の問題もあった。それらは前稿に新聞、雑誌等に掲載された資料を用いて明らかにしていくが、肝腎要とも言うべき『上方』に掲載されている佐藤くにの談話を落としていた。

佐藤くには、一八五八年（安政五年）生まれ。北新地で妓籍にあつた人で、後にはお茶屋を経営した。山村の舞は九郎右衛門町の「れん」の門弟「うの」に手ほどきされた。「れん」の没後は一世宗家・友五郎の教えも受けている。『上方』主宰の南木芳太郎が一九三五年（昭和一〇年）三月に第一回「京阪神名流 上方舞大会」を行っ

た際「関寺小町」で出演。すでに数え七八歳という老齢でありながら麗鑛とした舞姿を披露して新聞各紙に取り上げられ、話題を集めた人物だ。記事と写真は『上方』五一号（一九三五年四月）に掲載されている。

その佐藤くにが『上方』二八号（一九三三年四月）「上方遊廓号」に「曾根崎夜話」と題された談話を残している。聞き手は大阪毎日新聞記者の上田芝有（長太郎）、次々号に続編が載る。その中に上方舞や山村流に関する話題が当然のことながら出ている。一部を引く。

友五郎はんの跡は養女のお友はんが継ぎはりました。お友はんは新町に出てはつた芸子はんで教へ方は上手だしたが舞はもう一つだした。友五郎はんが病氣で寝てはるとき、お友はんの稽古を見て「そんなことで情がうつるか」とよう叱つてはつたのを覚へてます。そのお友はんはお酒呑みで、船頭はんと一緒になつたりして身持もよがないし、それに持へ物がでけんで山村流も段々衰微するばつかりで死にはるときなんか、荒れ／＼だした。わたいも「こらいかん、山村流ではお座敷が持てん」と思ふて東京の田町のお師匠はん（註、初代花柳壽輔）のところへ習ひに行きましたんや。

（引用に際して旧漢字は新字に改めた）

二世友五郎の養女の評判については前稿でも取り上げているが、

実際に大阪の花街に在籍した人の証言として紹介しておく。なお、右の「京阪神名流 上方舞大会」にも出演している神崎ゑん（えん）はくにの長女で、後に山村流を離れて神崎流を樹立、初代家元となっている。

前稿で佐藤くにを「山村流」と紹介したが、実は番組にはくにのみ流儀の明記がなかった。欠落と判断し、当然、山村流だと思って記述したが、本人の談話にあり、また『上方』五一号に転載された「新日報」の記事にも山村で学んだ後「芸妓に出てからは藤間、花柳、棟茂都、西川と各流を極めた」とあるところから、特に流儀名を記さなかつたものと考えられる。したがつて前稿の「山村流」を削除し、訂正する。

また、西形節子著『近代日本舞踊史』（一〇〇八年・演劇出版社）の資料編「上方舞の系譜」に次の記述がある。

神崎流は、新町系山村流のわかれといわれている。しかし、ここに新事実を提したい。

坪内逍遙が大正七、八年頃記した系図に、初世恵舞（引用者注・えん）の母、佐藤くにの名が「井上流」の中についた。佐藤くには北の新地で舞の名手として知られ、当時の一流師匠について、どん欲に学んでいたという。京から大阪に行つたときれる井上つるの門弟である佐藤くにが、恵舞の母と同一人とする、遠くは井上流の流れを汲むことになるのではあるまいか……と考えている。

くには井上流も学んでいたのだ。なお、神崎えんの母が佐藤くにであることは、先の上田芝有の記事の前文で明らかである。

## (一) 南木芳太郎の日記

次に新たに公開された資料から、「上方舞大会」に関する記事を抽出する。郷土史家・南木芳太郎の日記である。南木は山村流に三世家を復興させた中心人物で、その経歷については日記の一と二に肥田咲三先生が記されている。

日記は全一五冊で、現在、大阪市史編纂所が所蔵している。<sup>翻刻</sup>は「大阪市史資料」シリーズの中になされ、『南木芳太郎日記——大阪郷土研究の先覚者——』と題された。一〇〇九年一一月刊の第七輯に一(昭和五年分)、二〇一一年一二月刊の七七輯に二(昭和六〇一年分)、一〇年は欠、二〇一四年八月刊の八〇輯に三(昭和二二年、一三年分)が掲載されている。

南木芳太郎が郷土研究誌『上方』を創刊したのは一九三一年(昭和六年)一月。創刊号に「山村舞観賞会」の予告が出ていることは前稿に記したが、同じころ、NHKラジオで「上方情調と山村舞」と題した番組に出演していることが日記から分かった。放送は一月二十四日午後二時で番組名は「婦人講座」だった。

「京阪神名流 上方舞大会」の第一回が催されたのは一九三五年(昭和一〇年)三月一〇日。残念ながら当該年の日記が欠落してお

り、新たに付け加える資料はない。ただ、これも前稿で述べた通り、会の詳細な記録が前掲の『上方』五一号に残されている。幸い、第二回を開いた一九三六年(昭和一一年)の日記が翻刻されているので、三月二二日の会前後の記事から「上方舞大会」関連の文章を次に抜き出す。

○二月二五日 午後三時、北陽演舞場へ行き佐藤君に面会、上方舞開催相談の為、明夜扇やへ寄ることにする。同所より電話して高安・高原・新谷・上田長承諾する。

帰宅後、岡島・模茂都へ電話ス。

○二月二六日 午後六時半、北新地扇やに行く。高安・佐藤・高原・新谷の四氏と会合、上方舞大会の相談の結果、三月廿六日北陽演舞場にて開催の事。

○二月二七日 九時半より岸の里岡島氏宅に行き上方舞の話をして帰る、十二時。

○三月一日 京都片山氏へ電話ス、不在。觀世能楽堂へ再び電話ス。不在なれど三日なれば午後三時迄、四日なれば午前中能楽堂にゐるとの云ひ残しを聞き、四日に出京する旨を約して置く。

○三月四日 京都へ電話して片山氏の所在を聞く。午後三時頃、門前町宅にあるとの事。

午後二時、京阪電車にて京都へ行く。四条下車、新門前町の片山氏を訪ぶ。博通氏に面会、上方舞大会出演の顔触れを依

頼す。片山あい女の玉取、初子女の黒髪をきめて依頼して辞去、直に京阪電車にて帰阪。京阪食堂にて夕食して、帰途吉勇女を訪問、不在。そのまま帰宅ス。

○三月五日 上方舞打合会を延期するために新谷・佐藤に電話する。又岡島氏へも変更の旨通知。

○三月九日 三時半、佐藤駒次郎氏宅へ行く。岡島氏先着、上方舞の相談する。模茂都氏へ電話、菊原氏へ電話して置き、六時頃、石町の菊原師を訪ひ上方舞の出演を依頼して帰る。帰途吉勇女を訪問、不在。

○三月十日 京都片山氏へ電話する。上方舞の番組先刻郵便で送つたとの事、吉勇女に電話して出演承諾さす。岡島・高安電話、不在。新谷・佐藤電話して打合をする。明晚六時より佐藤氏宅にて会合する事を取極める。

○三月一日 大毎大阪版に「上方舞大会」の発表あり。

○三月一二日 箏曲音楽学校に交渉し、上方舞当日最後出演に春の曲を依頼し承諾される。新谷・岡島電話。谷口へ行き模茂都氏に電話（新町演舞場）し、作延の出し物を聴く、葛の葉道行との事。岡島へ電話し新町の各妓の席名を聴く。

○三月一三日 大阪日々新谷氏より電話。新町作延義太夫地なく、矢張江戸土産に変更。堀江一力の養女葉の葉に変更の旨。午後谷口へ行き校正、番組（上方舞）を印刷。午後八時、刷り上り千枚を佐藤氏へ届け、八時半、永楽席佐藤氏宅に行き上方舞入場券（京都二口及本会分受取つて戻る。指定席以外

補助椅子分（三円）三十枚、二円券五十枚受取る。

○三月一四日 新谷氏へ電話して、十七日の夜扇やへ招く新聞屋の連中の事を打合せする。早速左記の連中へ通知する。関中吉良・夕刊大阪野村・新日報鎌谷・新報八木・日々新谷及

富田・毎夕中井・大毎上田・大正日々稻垣の九氏。

京都片山へ入場券ア・イ分廿二枚と棧敷一間分、初子へ同様送る旨通知出す。

○三月一五日 朝、片山への小包速達便にて出す。

○三月一六日 岡島氏より電話あり、「上方舞」十名の場所を依頼される。

○三月一七日 新谷君に電話、今夜の打合せ、模茂都・岡島・佐藤へ電話する。清岡（吉勇女）へ電話して切符の売行尋ねる。上方舞申込み続々あり。

午後五時過ぎ扇やへ行く。上田・新谷・稻垣・佐藤先着、後より野村及鎌谷来る。夕食を済まして上方舞の話に移る。九時解散す。

上田君と一緒に帰る。夜、招待券の発送する。上方舞申込者の場所取りを極め、それ／＼発送の手続をする。佐藤君に電話、場所のことを聴く。就寝三時。

○三月一八日 芦屋の（欠落）氏へ電話、二階正面六人分と極める。

北島君來訪、二円券一枚渡す（二円受取り）。尼崎飯田氏、二階正面二筋目三枚約束す。放送局南江氏より電話、二階一

筋目一人分約束す。

夜、玉樹君來り、二階二円券四枚渡す（八円受取）。

九時頃、山村らく女を訪ひ番組歌詞に就て尋ねる。

佐藤君に電話して、浮れ唱歌及三国一の歌詞を至急頼む。

○三月一九日 京都片山博通氏・岡島氏・後藤氏・谷口印刷所、

右電話す。京都片山・岡島氏番組歌詞問合せ依頼す。

谷口へ行き、斎藤氏の手より松坂屋白根氏に電話して、番組

唄本を作ることに極まる。

○三月二〇日 木村彦右衛門氏より五名階上申込あれど場所なし、断る。朝、吉崎氏より使あり、会費及会員紹介と切符一枚申込みあり。午後、長谷川氏を訪ひ高辻氏の切符の事にて

面談す。岡島氏（新聞店）へ立寄り唄本（歌詞）を受取り、

谷口へ寄る。佐藤氏より歌詞届いてゐた。

帰宅後午前一時、新谷氏より電話にて棧敷一の招待場所を変更してくれとの懇願、致し方なく西を割愛する。京都片山氏より歌詞「玉取り」到着。

○三月二一日 大会番組唄本の歌詞整理して置く。明朝谷口へ持参の上、急に組ます事。

○三月二二日 午後早々、谷口へ行き番組唄本を渡す。

○三月二三日 岡島・新谷・三越（井ノ口）各電話する。

山村らく女へ招待券持參。

貞本てい女へ招待券持參す。

岡島氏より電話あり、新町地方の件。

○三月二四日 十一時、高しま屋東島氏招待券一枚渡す（内

枚松阪氏）。谷口へ立寄の上、北陽演舞場へ行く。堀江一力

の松露・北陽宣貴子代小辛・南地吉勇、それ／＼地方（菊原

社中）舞台に稽古打合する。新町定奴、地方の断に来る。南

地里光来る。其他高安・食満・新谷・中井・岡島・上田長・

写真版朝日長谷川・大毎堤・松原、筝曲音樂学校の藤田君等。

八時終了。九時二十分、朝日花光君來訪。上方舞の話をする。

○三月二五日 谷口へ立寄り番組唄本の出来上りを二部受取り

帰宅。

○三月二六日 朝日新聞ホームページセクションに上方舞の話として掲載さる。

午後二時、谷口北陽演舞場へ行く。四時過ぎ中井君・新谷君

来る。その内新町地方連・堀江・北陽の立方連も揃ひ、五時半、司会者として挨拶。食満君の口上、模茂都氏の講演終る。

（午後六時）過ぎより梅の宿を序開きに順々に舞ひ納めて、

午後十時半終演、解散す。

○三月二七日 前日草疲れにて午後遅くまで就寝す。

○三月二八日 北陽演舞場へ行く（午後五六時頃）。

佐藤氏に面会して、京都分の礼金百三十五円九十銭受取り帰る。

○三月二九日 午後、京阪電車にて四条着。新門前町の片山氏を訪ふも不在、礼金百三十五円九十銭現金にて持参せるを留守居に渡し置く。

○四月一日 片山博通・模茂都陸平・高原・高安、舞の原稿依頼状出す。

高麗橋より島町へ赴き菊原氏を訪ひ、礼金五十円・箏曲学校三十円を届ける。

○四月三日 佐藤氏と打合せて、七日午後五時よりいせやにて、上方舞の慰労会を催す事に決す。

○四月四日 上方舞慰労会通知する。高安・岡島・模茂都・食満・高原・新谷・中井・佐藤・神崎・永井の十氏、外に上田長は面会して知らす事にする。

○四月七日 四時半、宅を出て今橋いせやで催す上方舞大会の慰労宴（五時案内）へ行く。神崎女・佐藤・上田両君来り、続いて新谷・永井・中井の三君、少し遅れて模茂都・高安の顔が揃ふたので、六時過ぎ大座敷で御馳走する事になり、高原君へ電話して置くと、やがて来会。いせや女将大いに歓待して御馳走振りに一同満足。十時頃解散す。

以上、南木芳太郎の口記から第二回「上舞大会」前後の記述を抜粋した。

三月四日の記事にある井上流の「片山あい女」は「井上愛子」の名前で出演した後の四世井上八千代である。

一回目の記録がないとの、翌年の三回目の記述が簡略になつてないことから、長くなつたが引用した。ひとつの催しを実施するためには、時には深夜まで、準備段階からさまざまな手続きを経て当日を

迎えていることがよくわかる。南木はこれらを『上方』の編集や上方郷土研究会主催の毎月行事の運営、自身の講演など他の仕事と並行してやっていたのだ。

山村流に三世宗家が復興されたのは一九四一年（昭和七年）のことと、近い将来、当該年の日記が翻刻されたら、襲名披露に至る経緯がより明らかになる可能性もある。

### （三）谷崎潤一郎の虚実

谷崎潤一郎が関東大震災に被災して後、関西に移住、上方の芸能に親しみ、その影響が作品に現れたことや、演者たちと交流したこととは夙に知られている。演者の側からも谷崎の想い出は文章として残されている。

谷崎は『上方』に二回寄稿した。六五号（一九三六年五月）の「上方舞大会について」、九八号（一九三九年一月）の「えびらくさのこと」、一〇〇号（同四月）の「偶感」で、いずれも中央公論社の全集に収録されている。「えびらくさんのこと」に記された山村らくとの出会いに関する記述も、南木日記に出てるので、要約して紹介しておく。

谷崎はかねてより山村らくの舞に心酔し、自身の娘に習わせたいと考えて出稽古を依頼したのだが、一度目は遠方であることなどを理由に断られていた。その後、夫人の妹が同様に山村流の稽古を始めたいと希望したので南木に相談した。以前の経緯から、らくのこ

とは諦めていたのだが、南木から推奨されたのはやはりらくで、今度は弟子入りが叶い、出稽古にも来てももらえることになったというものである。

日記の一九三六年（昭和二一年）一月二〇日に「谷崎潤一郎氏より来信　山村舞の件依頼あり」。続いて二月一日は「朝十時前、谷崎氏より電話あり。風邪の気味にて引籠り、山村師匠に未だ逢はぬ旨を話して置く」とある。さらに二月二八日「谷崎氏電話、山村の前稽古來月二日より願うから、当日連れて行くから南海で出逢つて呉れとの事。但し三日午後一時より二時迄に出逢ひする事を約す」。

そして三月一日「貞本邸にて山村らく女に面会して、明日谷崎氏同道する事を約ス。午後二時過ぎに来てもらひたしとの事。やがて三月三日二時前、谷崎氏より電話あり、阪急に只今着、これより地下鉄にて難波まで出向くとの事。早速難波駅に至り同氏及夫人と妹女に逢ひ、タクシーにて畠屋町三ツ寺筋北入高田方山村らく女を訪問して紹介し、弟子入を済す」とあって、入門を仲介した様子が克明に分かる。

これら的事実は小説『細雪』の中にフィクションとして描かれている。山村らくは「山村さま」の名で登場し、没後に追善の舞の会が行われことや南木芳太郎たち有志が上方舞復興のために活動したこと、仮名でだが小説の中に取り入れられている。なおこれらのこととは新潮文庫版『細雪』の「注解」に細江光によつてすでに解説されている。今回、口記が翻刻されたことによつて、谷崎自身が「えびらくさんのこと」に記した追悼文や、松子夫人の末の妹・信

子（小説の蒔岡家の四女・妙子）が、山村らく（同山村さま）に稽古を受けるに至った経緯の裏付けができたわけである。

その「えびらくさんのこと」の最後に（らく師匠は）「人真似をするのが非常に上手で、就中南木さんの真似は、その表情、話しづくり等、真に迫つていた」とあるが、『細雪』に登場する「山村さま」も「非常な話術家で、人の真似をするのが殊に上手」と描かれている。モデルの人柄が色濃く反映されているようだ。

#### （四）上方舞の呼称

「上方舞」の呼称は戦後のものであるという説が流布している。

吉村流四世家元・吉村雄輝が一九五二年（昭和二七年）に自身の会を開東で初めて開くことになった時、新派の名優・花柳草太郎に「上方舞研究会」と命名してもらったことを初出とするものである。しかし、これまでも見てきたように、「上方舞」は戦前からある呼称である。推測に止まるが、南木芳太郎が第一回の「上方舞大会」開催を計画した時に、京舞井上流を初め、吉村流や模倣都流からも出演者が集うことになり、それまでの「地唄舞」や「座敷舞」、「上方」で用いていた「山村舞」に代えて「上方舞」という呼称を新たに造語したのではないか。もしも一九三五年（昭和一〇年）の南木日記が残っていたら明らかになつたかも知れないのだが、残念ながら今は不明である。

吉村雄輝の会に花柳草太郎が「上方舞研究会」と名付けたことは

事実である。けれども、その二年前の一九五〇年（昭和二五年）に

刊行された『日本舞踊大鑑』（東京文化タイムズ社）には棟茂都陸平が「上方舞雜感」と題した一文を寄せている。

今回、南木の日記を読んで「上方舞」が頻出していることから、南木芳太郎の功績の一つである上方舞復興を跡付けるためにも、戦前からの呼称であることを改めて主張しておきたい。

## むすび

前稿「山村流宗家復興——市民が支えた上方舞の伝統——」を著してから一四年後の二〇〇九年、私は大阪樟蔭女子大学国文学科に赴任した。現山村流六世宗家のご母堂である山村糸師（没後に五世宗家追贈）は本学科の卒業生である。その他、山村流には樟蔭学園の出身者が多い。見えない糸が私と山村流と本学をつないでくれているように感じる。

山村流は二〇〇六年に創流二〇〇年を迎える。二〇一四年には現宗家が流祖である「山村友五郎」の名跡を一九年ぶりに三代目として襲名された。宗家の父君は宝塚歌劇団特別顧問の植田紳爾氏だが、二〇一四年に発行された『宝塚歌劇百年を越えて 植田紳爾に聞く』（語り手＝植田紳爾／聞き手＝川崎賛子・国書刊行会）を読んで、植田先生が山村流の初代・友五郎（舞扇斎吾斗）の研究を古井戸秀夫氏に依頼されていたことや、一九九一年、ご長男が宗家を継がれた時に「山村友五郎」の襲名を意図しておられた事実を初めて知る

ことが出来た。

今年五月には四世宗家の二七回忌を追善する「舞扇会」が開催されるところで、山村流のますますの発展を祈念して擱筆する。